

〈研究ノート〉

## 「聞き書き」の可能性

— 先行研究のレビューに基づく考察 —

玉木 千賀子

### 要 約

教育活動の一環として取り組んでいる「聞き書き」の研究動向の確認と活動の可能性を考察した。「聞き書き」は多岐の領域で取り組まれているものの、理論的研究、方法の有効性に焦点化した研究蓄積は限られている。しかしながら「聞き書き」には、多様なつながり・新たな地域のストーリーの構築をはじめとする効果があることが確認された。これらの効果は、地域共生社会づくりという今日の社会福祉の方向性と一致する。そのため他者の話を聞くことの意味を問い直し、「聞き書き」の視点・方法をこれからの社会福祉の支援に活かすことが求められる。

キーワード：聞き書き，地域共生社会，多様なつながり，ソーシャルワーク

### はじめに

「聞き書き」の意義、効果等に関する研究動向をとらえ、教育活動の一環として実施している「聞き書き」<sup>1)</sup>の理論的根拠と活動の可能性を考察することを目的とする。方法として、論文データベースおよびスノーボール方式を用いて「聞き書き」に関する先行研究を抽出し、①研究領域、②定義、③意義、④背景、⑤効果、⑥検討課題に関する言及を引用・確認し、それらの内容をふまえて「聞き書き」のもつ可能性について考察をおこなう。

### I. 研究領域

論文データベース Cinii で「聞き書き」のキーワードを設定し、2010年～2019年に公表された研究を検索した結果、595件が抽出された。その数は2010年～2014年222件、2015年～2019年394件と近年増加傾向にある。研究領域については、教育学、社会学、水産学、生物学、調理科学、民俗学、歴史学等の領域で「聞き書き」を研究方法として採用している。2019年の1年間に限定すると64件のうち調理科学（食の文化・伝統）に関する研究が半数を占め、民俗学、歴史学の研究が続く。抽出された595件のタイトルおよびアブストラクトを確認した範囲では、社会福祉学に関係した研究は確認されなかった。

「聞き書き」は、全国各地でその取り組みが拡大している（小田2018b）。医療や介護、教育など、これまで「聞き書き」とは縁がなかった分野で注目が高まり（辛島2012：120-121）、高齢者や在宅療養者を対象として注目されてきている。しかし「聞き書き」のもつ意味、有効性など、

「聞き書き」の理論的基盤や技術的方法についての研究蓄積は十分ではない（松原・安東・八塚 2015:335）。また近年は、地元学<sup>2)</sup>や自地域学<sup>3)</sup>などの地域政策の一環として用いられている（小関 2018:33-34）。

以下、「聞き書き」の定義、意義、背景、効果、検討課題に関する言及を先行研究から抽出した。その際には文脈を含めて先行研究の内容をとらえるために、可能な限り原文のまま示した。

## II. 定義

介護民俗学<sup>4)</sup>という独自の切り口から高齢者グループホームの利用者の「聞き書き」に取り組む六車は、「聞き書き」とは対話のなかから調査対象者の言葉を聞き、書き留めることで民俗事象をとらえようとする活動であり、失われつつある地域の記憶を次世代に継承していくことを目的とした民俗学で伝統的に行われてきた手法（六車 2012:95）と説明している。地域において多くの経験や民族的知識を有する存在である高齢者に語り手となってもらい、彼らに「教えるを受ける」という立場で話を聞かせてもらうことを基本姿勢とする（六車 2016:59-60）。

聞き書き作家の小田は、語り手の話を聞き、その人の「話し言葉」で書いて活字にして後世に残す（小田 2012:6）と「聞き書き」の手引書的な著書で述べている。さらに「聞き書き」には、語り手の「人間性」、その人らしさが出る。語り手をよく知っている人であれば、その語り手の顔や動作が浮かび、たとえ、その人が亡くなっている、話す調子や言葉遣い、語尾や口癖などでその人らしさが表れ、その本のなかで、語り手はいつまでもずっと生き続ける（小田 2012:6-9）。

「いちどすべて聞いた後にならばなおした」人の脳を再構築する作業（西岡・小川・塩野 2005:553-556）とは、職人の技術の記録に取り組んでいる塩野が宮大工の西岡常一に対する10年間に及んだ「聞き書き」を振り返って述べた言葉である。

聞き書き作品の発表を市民活動として取り組んでいる辛島は、聞き手と語り手の信頼を築き上げながら、様々な人生を聞き、庶民のドラマとして作品にまとめる、他者の文化や習慣を知るため、学ぶために用いられてきた手法（辛島 2012:119-120）であると説明している。

社会教育活動として取り組まれている「聞き書き甲子園」の聞き書き場面についての会話分析に取り組んでいる石村は、「相手に話を聞きながら、その話し手の言葉だけで文章をまとめていく手法。語り手と聞き手のやりとりによって進められる行為」（石村 2015:52）としている。

平成25年度文部科学省「地（知）の拠点整備事業」の人材育成プログラムに「聞き書き」を手法として用いた小関は、「話し手にインタビューし、語られた言葉だけで文章を構成し作品にする一連を指す。一般的なインタビュー記事では質問と回答が交互に掲載されるが、『聞き書き』では、出来上がった作品は、話し手があたかもひとり語りしているような第一人称の文章になる」（小関 2018:33）と説明している。

先述の石村が研究対象とした「聞き書き甲子園」をはじめ東日本大震災被災地の聞き書きや環境保全活動等に取り組むNPO法人共存の森ネットワークは、『「聞き書き」の活動によって、耳と目と心で相手と繋がって、自分にとっての幸せとは何か、どうしたら隣の人も幸せにできるのか、自分なりの物差し（価値基準）をみつける』（NPO法人共存の森ネットワーク 2020:4）活動であると説明している。

### Ⅲ. 意義

「聞き書き」の意義として次に示す内容が提示されている。

話し言葉をとおして、その人の人間性が浮かび上がることに固有の意味があり、語り手の「人間性」、その人らしさが出る。語り手をよく知っている人であれば、その語り手の顔や動作が浮かび、たとえ、その人が亡くなっている、話す調子や言葉遣い、語尾や口癖などで、その人らしさが表れ、その本のなかで、語り手はいつまでもずっと生き続ける（小田 2012：6-9）。

人は誰でも「自分が主人公の物語」を生きている。だが、この世に生を受けた人たちの多くが、その「物語」を語ることもなく、彼岸にそのまま持って行ってしまう。残していけるのは、かなりの著名人か、「自分史」という名の文章をかける富裕層で、名もない庶民の多くは、何も語らないまま、「ただ黙って」去っていく。「話者の語り言葉で書くこと」すなわち「聞き書き体」で書くことに力を注ぐ。それはその人のこれまで生きてきた「物語」の史実もさることながら、「その人らしさ」に最大の重点を置いているためである（小田 2018a：1）。

キャッチボール次第で想定外の話が出る、本人も次の展開が読めないおもしろさがある。具体的に話を聞く、人の人生はディテールにこそおもしろさがある。いかに自分が物事を知らないかわかる（西岡・小川・塩野 2005：553-556）。

一方的に聞いたり、しゃべったりするものではなく、聞き手と語り手とのやり取り、つまり対話によって展開していく、その点が書き手のモノローグである「自分史」との違いである（六車 2016：60）。

庶民の歴史に誇りを持ちつつ、人や地域の歴史に光をあてる。庶民の生きた証の記録を後世に伝えていくことを目的（辛島 2012：123）とする。記録に残ることによって全然知らない人でもその人のことがわかる（辛島 2012：130）。

聞き書き作品は、語り手と読者、聞き書き活動の会員と語り手、語り手と読者の間を媒介し、記憶を共有させることでつながりを強化している。明確に分類しえない者どうしによる活動、語り手と会員の共同作業と読者の存在、記憶の共有に力点が置かれる（辛島 2012：138）。

「聞く」という行為の能動性・主体性。聞き手が書き起こし、編集した原稿を話し手にチェックしてもらう、といった複数回の相互行為を経て語りを練っていくとともに、両者の相互理解の醸成、「共時（同時）性」が存在する（渡辺 2018：29-31）。

時代背景や環境が個人の人生に深く関わっていることを含めて記憶を継承する（小関 2018：40）。

初対面の人や世代の違う人にいろいろな話を聞くことができる、職業に関連する食べ物、着る物、身のこなしなどをひとつずつ正確に聞いて書きとることによって民俗学の資料としての価値をもち、その人の職業を通じて人生を浮かび上がらせる（NPO 法人共存の森ネットワーク 2020：18-19）。

### Ⅳ. 拡大の背景

「聞き書き」が広がりを見せてきた背景として次の要因が挙げられている。

#### 1. 高齢化に伴うボランティア活動の拡大

人口の高齢化に伴う「福祉」活動の広がり、資格をもたない人が高齢者によるこんでもらえるボランティアとして拡大した。高齢者は話をしたくても相手がいない。そんな時に訪ねてきて、話を聞いてくれるボランティアは歓迎される（小田 2018b：25）。

医療や介護、教育などの新たな分野で注目され、ホスピスや病院を中心に活動している（小関 2018：33-34）。

## 2. 他者理解・文化継承の方法としての導入

他人から聞知した事柄を文書に記録し、その結果を「聞き書き」とすることは15世紀後半から定着した。近代では一般庶民の間で知識や技術を共有することに主眼が置かれ、自分の世界に新しいものを「取り込む」手段として使われる。現代は戦争、昔の暮らしや知恵、職人の技術、著名人の裏話、歴史上の出来事などさまざまな「聞き書き」が展開されており、他者の文化や習慣を知る、学ぶために用いられてきた手法（辛島 2012：120-121）である。

家庭や地域社会における文化継承が行われにくくなっている。自然な世代間継承が困難になった現在においては、学校教育や社会教育のなかで、そのような場を人工的に創出せざるをえない（石村 2015：51）。

## 3. ナラティブ（語り・物語）への関心

利用者や患者の語り（ナラティブ）をケアに活かすなど、超高齢化・人口減少が進む日本の各分野における方向性を模索するなかで、「個人の語り」から始めるありようとして注目されている（小関 2018：33-34）。

## 4. まちづくり・地域おこし

歴史・文化・生活を見つめ直し、地域おこしやまちづくりにつなげていく地元学や自地域学といった活動のなかで「聞き書き」の手法が活用されている（小関 2018：33-34）。

## 5. 人材育成

人材育成や教育分野では、中学や高等学校の国語教育実践・研究で国語力に留まらない効果があることが報告されている。実践・研究の方法として使用されることが多いことから、手法そのものの有効性についての研究は少ない（小関 2018：33-34）。

教育の分野では、高校生が農林水産業やモノづくりの技をもつ老人に「聞き書き」をする全国的なプログラムが行われている（辛島 2012：120-121）。

## V. 活動の効果

「聞き書き」に取り組むことによって得られる効果として次の6点が挙げられている。

### 1. 語り手の認知機能の活性化

脳の活性化、認知症予防に役立つ新たな手段として注目されている（小田 2018a：26）。

### 2. ケアの質の向上

医療・看護・介護の分野で特に全国的に一気に「聞き書き」が広まったのには、（語り手の認知機能の活性化とは）別の大きな理由がある。それは「語り手」と「聞き手」の距離が一気に縮んだだけでなく、これまでになかった心のこもった医療や看護、介護が可能になるという「バタフライ効果」である（小田 2018a：26）。

「聞き書き」を導入した際の感想に、「聞き書きボランティアを通して『人生の先輩の話の聞かせてもらいたい』と思うようになった」、「認知症の母親への聞き書きから怒鳴りたくなるほどの母の非論理的な言葉が、収集（聞き書き）によって『もっとおもしろいことを言わないかな』と思うようになった」（小田 2018a：26）。

「聞き書き」によってその人の人生が立体的に浮かび上がる、「介護する／される」を超えて「人と人」として向き合えるようになり、結果的にはより深いケアにつながっていったように思う（六

車 2016 : 60).

看護学生によるグループホームに入居する認知症高齢者の「聞き書き」のリフレクションレポートの分析から、「聞き書き」によって得られた学びとして「語り手の個人史や価値観の理解が深まる」、「個別性のあるケアを創り出す」、「語り手の豊かな感情を呼び起こす」、「語ることで人生を振り返り、過去の記憶や思い出に親しむ」、「語りを引き出すための事前準備の重要性」、「語りを傾聴し、ありのままを受けとめる姿勢の重要性」、「記憶の想起を助ける工夫の重要性」、「聞き書き中は語り手に合わせた状況判断が求められる」の8つのカテゴリが抽出された（荒木・伊藤・加藤他 2019 : 31）。

### 3. 自己の生き方に対する肯定感の醸成

「話す」ことで、自分の物語を確認し「生きがい」を感じる、自分が人の役に立っているという自信が回復する（小田 2018a : 26）。

「1対1の関係で綴られた聞き書きをほかの利用者、スタッフと共有することによって、閉塞的になりがちな介護現場の雰囲気やそこに集う人たちの関係性が好転する」、「互いの存在を認め合い、思われる心地よい居場所を形成する」、「他の利用者やスタッフも巻き込んだオープンな対話へと開かれる」（六車 2016 : 61）。

高齢のがん患者に対する「聞き書き」が高齢者自身の生き方に及ぼす影響として「自己肯定、自己再帰性の発見によるアイデンティティの再構築」、「後続する子供や後輩を社会化する主体として社会に存在する『後続世代への継承の必要性』の認識」が認められた（松原・安東・八塚 2015 : 335-336）。

話し手自身にとっての自己や地域への認識。自地域のことはあまりにも日常で「あたりまえのこと」となり、そのあたりまえが尊いことについて「聞かれることで気づく」という側面がある。聞き手に問われることで語りがつくられる、語りがともに「共同作業」によってつくられる（小関 2018 : 39-40）。

今までの自分の仕事や生活を振り返り、それを棚卸しして受け渡す行為。なぜそういう風にしななければいけなかったのか、時代背景や環境が個人の人生に深く関わっていることを含めて伝える。地域の記憶を伝える場（小関 2018 : 40）。

### 4. つながりの構築

「単に記録するだけではない。世代や場所を超えて人と人がつながるという効果を生み出している」、「聞くことを通して知り、知ってしまったら動かすにはいられない。地域でさまざまな活動をおこなったり、参加者同士のつながりが生まれている」、「聞き書きの本が読まれることで、あらたなつながりも生まれる」（佐野 2015 : 75）。

老年者のなかに血のつながりを超えた継承性が芽生える。世代などの差による「非親和性」から「親和的な方向」へと舵を切り、コミュニケーションにおいて異質性と親和性のダイナミズムのもとで老年者から若者への文化継承が行われる。時をともに過ごすなかで両者の間につながりが生まれる（石村 2015 : 57）。

マスターナラティブ、ドミナントストーリー（全体社会における支配的言説）、モデルストーリー（特定地域・集団内での支配的な語り）を乗り越えた〈いま、ここ〉での住民と他者（学生など）、あるいは住民相互の対話的構築が契機となった新たな「対話的共同」が（聞き書きを用いた）地域のワークショップを通して共有される。地理的・概念的に固定された「地域」とは異なる、複合的で可変的な地域ストーリー（心情的住民）が生成される可能性がある（小関 2018 : 32）。

完成した作品、聞き手の気づき、学びの報告に対して、住民から「感謝」や「感動」がフィードバックされることで愛着が醸成される（小関 2018：39）。

高校生や大学生が媒介者となって、地域住民のあいだにあるつなぎ目を結び直すことにつながる。隣人である故にあえて尋ねることもなかった事柄について真っ直ぐな関心を持って聞き、語られていくことで、地域住民の出会い直しを演出する（小関 2018：42）。

「聞き書き」における高校生や大学生という住民の日常にとってある意味異質な訪問者たちは、水面に小石を投げたときの波紋のように、その関係（学生と住民の関係）を動かし、意識させる。しかしその存在は、関係性を揺り動かすだけでなく、住民同士の「出会い直し」や「つなぎ目を結び直す」関係性を紡ぐ存在になる（小関 2018：45）。

## 5. 聞き手の能動性・主体性の形成

話す・聞く・まとめるという行為への自覚、能動的・相互的な聞く行為への気づき、日常的な人との関わりのなかでいつも想起する身体化した経験—「結構ことあるごとに思い出します。仕事中、お客様と話している時、人の話を聞く場面。お年寄りと話していても『あ、聞き書き』と思うし」、「人の話を聞くってことができるようになりました」—一人の人生を聞いてから社会に出ることで冷静に自分の人生を歩めるモノサシができる（小関 2018：37-38）。

## 6. 地域理解

話し手の個人の語りを通して地域理解がすすむ。「聞き書き」の「場」を通して人と環境の関係性への気づきが得られ、そのうえで話し手やその人が住まう地域理解をしている（小関 2018：38-39）。

# VI. 先行研究が提示する「聞き書き」の検討課題

## 1. 地域貢献・コミュニティの形成

地域づくりに関する大学の地域貢献が推し進められるなかで、地域に対して大学が「貢献」できる、という視点にどこか「おごり」が含まれており、地域のなかで育まれてきた知恵や技、生きざまとしての哲学を伝えてくれるのは、名もなき名人たちである。「地域の大学貢献」とは、学生も大学教員も、地域からさまざまな知恵や技を教えていただく側にあり、地域のネットワークのなかで、大学生、大学教員、そして大学そのものを育てていただくものである。「知」は大学の専売特許ではないという当たり前のことをもう一度問い直し、暮らしのなかで息づいてきた「知」をどのように大学に接続させてもらうのか（佐野 2015：76）を考える。

少子高齢化による今日の地域コミュニティの存続の危機的状況において、自治会など既存の概念枠組みの限界と新たな方向性が問われるなか、「聞き書き」には、多様な住民の相互理解と地域における複合的・可変的な「モデルストーリー」創出というコミュニティの「再構築」の可能性（渡辺 2018：24）がある。

個の主張より集団秩序の維持が優先されるために地域コミュニティの存続が危機にさらされている現在、上の世代も下の世代も個を主張できる仕組みが「聞き書き」である。このなかで重層的に共有された個々の経験は、柔軟で主体的な「中間集団」としてのコミュニティを形成していく可能性がある（渡辺 2018：32）。

## 2. 社会福祉援助の視点に関する課題提起

社会福祉の援助では非言語的コミュニケーションが過剰に重視されがちであり、この場合に強調されるのは、語られる内容の受け取り方ではなく、聞き手側の姿勢や態度である。利用者の思

いや気持ちはそう簡単に察することができるのだろうか。「何が語られたのか」を理解する民俗学の手法で相手の生活や文化を理解することが、介護の現場にも有効ではないか（六車 2012：98-99）。

回想法ではテーマから逸れることは参加者が戸惑うので慎重、回想法に適した人を選ぶ。また実施に際しては、利用者の行動を評価しようとする点に違和感がある。長年生きてきた人をあらかじめ設定した枠組みのなかで受け止めることができるはずがない（六車 2012：149）。高齢者の心を支えるという目的を掲げた技法としての回想法は、誰でもできるように方法論化が進んでしまったゆえに、実際の現場で行われる際に、目の前にいる利用者の多様で複雑な人生を見据えるまなざしを曇らせてしまうことにつながってしまったのではないか（六車 2012：150）。

## VII. 考察

これまでに取り上げてきた各項目の先行研究の内容について考察する。

### 1. 研究傾向

「聞き書き」に関する研究数は増加傾向にあるが、過去 10 年間に於いて社会福祉の研究対象として「聞き書き」は取り上げられていない。この点については、「聞き書き」自体が社会福祉領域では取り上げられていない、実践には取り組まれているが研究対象としては取り上げられていない、のいずれかが考えられる。医療や介護の領域における取り組みに注目が高まっている（小田 2018b）という指摘があることから、これら隣接領域の影響を受けて社会福祉の領域でも「聞き書き」の実践・研究に取り組まれつつあるといえるのではないか。

### 2. 定義

ストーリーおよび関係性に焦点をあてた説明、聞き手の側に立った活動の意味についての説明がなされており、経験や地域に根づく知識について語り手から教える、地域の記憶の次世代への継承（民俗学的な視点に基づいた説明）、人が生きてきた軌跡を残すなどの内容が示されている。そのほか方法に焦点化した説明では、聞きとった内容を再構築する、話し手・聞き手の相互関係から成り立つ行為、聞き手の価値基準が形成されるなどの内容が提示されている。

### 3. 意義

市井の人々の暮らしを知ること、それに留まらず語り手と聞き手の関係性をとおして新たなストーリーが生み出される点に「聞き書き」の価値をおくことを複数の先行研究が示している。そのほか語り手と聞き手を媒介する装置として「聞き書き」を位置づけ、そこに生じる「共時性（同時性）」が互いの理解を生み出すことに「聞き書き」の固有性を見いだしている。さらに自分史を語るができる著名な人、富をもつ人ではなく、語るべき価値があるとは見なされない人の語りから浮かび上がってきた新たな物語（オルタナティブストーリー）が生成される点に「聞き書き」の意義があるとしている。

### 4. 背景

高齢化の進展による話し相手のボランティアの需要、家族・地域機能の縮小による生活の知恵・社会生活技術の継承についての模索、過疎化する地域のあり方に関する検討の必要性など、社会構造の変化が「聞き書き」の背景にある要因の一つとして浮かび上がってきた。これらの課題に対処するための手がかりを、オルタナティブな視点に基づいて「個人の語り」に求めるという潮流がもうひとつの要因として挙げられている。

「聞き書き」の方法は実践のなかで取り入れられてはいるものの、方法論的有効性の検証は乏

しく、「聞き書き」の有効性を分析するための切り口として、地域社会のことを地域の人々から学ぶというナナメの関係（山崎 2016：393-394）という視点が取り上げられている。

## 5. 効果

認知機能の活性化やケアの質の向上、地域理解などは一般的に考えれば比較的容易に推測できる効果であるといえる。また、語り手・聞き手の両者に生じる自己および生き方に関する肯定感については、Mayeroff (1971=1997：83-8) のケアの相互性、さらに松原・安東・八塚 (2015) も指摘している Erikson (1997 = 2001：83-86) の高齢期における「自我の統合性」に理論的根拠を見いだすことができる。

さらに「つながりの構築」、「聞き手の能動性・主体性の萌芽」という効果が提示されている。

「聞き書き」によって語り手と聞き手のつながりが生まれる。しかしそれに留まらず、「世代や場所を超えたあらたなつながり」、「知ってしまったら動かずにはいられない」、「血のつながりを超えた継承性」、「複合的で可変的な地域ストーリーの生成」など、既存の地域コミュニティが失った機能を発揮することや、新しい地域の姿を描くことに結びつくとしている。

また、聞き手の経験は身体化され、その後の他者との関わりや自らの人生を歩む際の指標になり、聞き手の側の自己実現の契機に結びつく可能性を秘めているといえる。

## 6. 先行研究が提示する検討課題

大学による地域おこしの活動として「聞き書き」に取り組んだ佐野 (2018) は、大学が地域に貢献できると考えることへの疑問を提示し、大学は地域から育ててもら側にあること、地域の「知」をどのように大学の「知」に接合するのか、そのあり方に関する検討課題を提起している。ここで提起されている「知」の接合の視点は、「研究者の役割は、現場で生じている課題を解決するための素材を現場実践者と一緒に考え、そこから地域福祉の課題を発見し解決のための実践仮説を立てることである」という地域福祉実践研究の考え方（平野・古市・猪俣他 2020）と重なる。

渡辺 (2018) は、個々の人々の意識の変容や社会構造の変化によって、新しいコミュニティのあり方が問われており、地域の多様な人々の「聞き書き」とおした経験が、その構築に作用する可能性を指摘している。前述の地域福祉の実践研究における現場実践者と研究者の関係を地域における聞き手と語り手の関係に置き換えて、渡辺 (2018) の指摘を考えると、人々の意識や行動、さらには地域の願いを、「聞き書き」とおして大学が共有させてもらうことによって、地域に大学の知をどのように活かすのか、という地域の求めに応じた大学の貢献活動に結びつくと考えられる。

六車 (2012) は、社会福祉の支援の場でおこなわれている「話を聞く」ことに違和感を示している。その違和感とは、信頼関係の形成や被支援者の感情表現をうながすための主要なスキルとして傾聴を重視する (Biestek 1957 = 1996：67) という伝統的なカウンセリング型ソーシャルワークの考え方を指していると考えられる。社会生活の支援を目的としているからには、傾聴は感情の表出のためだけではなく、話の内容をとおしてその人の生活を知るために機能しなければならない。しかし、アセスメント項目に沿った情報収集が一般化した今日のソーシャルワークでは、被支援者の話を聞くことの目的が課題分析という支援者の必要を満たすものとなり、被支援者の話に耳を傾けることが疎かになっているという可能性がある。

社会福祉研究では、被支援者のナラティブ（語り・物語）に着目することの重要性が認識されてきている（吉田 2016）。しかし実践の場では、語りを被支援者に委ね、その内容から相手の生活や文化を理解することの重要性は必ずしも共有されているとはいえない。回想法に関しては高

高齢者福祉の分野で取り入れられているが、その関心の多くは認知機能の向上に向けられている。六車（2012）が指摘する「話を聞く」ことに関する社会福祉の支援の傾向は、これまでのソーシャルワークおよび社会福祉の歴史的背景や方法論の蓄積、社会からの期待に応えるかたちで形成されてきたものである。その点を認識したうえで、これからの社会福祉の支援にどのように活かすのか、「話を聞く」ことの意味を問い直す必要がある。

## VIII. 社会福祉の支援における「聞き書き」の可能性

互いに支え合い、個が尊厳される「地域共生社会」に向けて取り組むことが、現在の社会福祉の支援の中心的課題として位置づけられている。その取り組みには、他者のことを「我が事」としてとらえる意識が必要であるとされる（厚生労働省 2017）。しかしながら、生活の多様性が拡大し、地域コミュニティが脆弱化している状況のなかで、自分のこととして他者の生活やその困難を理解し、支え合うことの重要性は、理想的には認識されていても実現することの間には隔たりがあり、そこにどのように橋をかけるのかという具体的な取り組みが重要になる。

『『ご当地モデル』をつくり上げる』、「地域のオーダーメイドの取り組み」（宮本・村木・古都 2021：14-15）など、地域の独自性を発揮することが「地域共生社会」実現の鍵になるという指摘がある。これら、取り組みの具体的な方法を実践の場に委ねるという考え方は、生活困窮者自立支援法による支援から導入された視点である（熊木正人 2015）。異質な存在への排除、物理的な貧しさと生きる意味の喪失という実存的な貧しさの混在など、多様な人々の生活の困難に対しては、一定の支援モデルを提示することは難しく、地域の知や経験を動員し、地域独自の支え合いに探索的に取り組むことが求められている。

多様なつながりの形成、新たな地域のストーリーを構築する、という「聞き書き」から得られる効果は、「地域共生社会」実現の考え方と重なる（厚生労働省 2017）。人々の語りに耳を傾けることの多義性を踏まえ、社会福祉の支援における「聞き書き」の導入、効果についての検討が求められる。

## 注釈

- 1) 2016年度から専門演習の取り組みとして、地域の高齢者の人々を対象とした「聞き書き本」の製作に取り組んでいる。学生が2人組になり、「聞き書き」の依頼、インタビュー、音声起こしをおこない本に仕上げる。2019年度までに19人の協力者に「聞き書き本」を贈呈した。
- 2) 地域を多様な生き方と喜怒哀楽を抱える人びとが集まる場としてとらえ、地域のあり方を地元の人から学ぶ「地域の再生」に向けた取り組みとして各地で実践が展開されている（結城 2009）。
- 3) 世界的視点で文化・環境をとらえる地域学と区別し、地元の人たちによる生活文化の調査、地元へのフィードバックを目指す取り組みとして実践がおこなわれている（樋口 2012）。
- 4) 介護現場の民俗学としての意味、介護現場に対する民俗学の貢献を問題意識として六車が自身の著書のなかで独自に使用している（六車 2012）。

## 引用文献

- 荒木さおり・伊藤智子・加藤さゆり他（2019）「認知症高齢者に対する『聞き書き』による看護学生の実習での学び」『鳥根県立大学出雲キャンパス紀要』第15巻、pp.25-33。  
Biestek, F.P. (1957) *Casework Relationship*. (1996 尾崎新・原田和幸・福田俊子訳『ケースワークの原則』[新

- 訳版] 一援助関係を形成する技法』誠信書房.)
- Erikson H. Erik (1997) *THE LIFE CYCLE COMPLETED* Norton & Company (= 2001 村瀬孝雄・近藤邦夫訳『ライフサイクル、その完結〈増補版〉』みすず書房.)
- 樋口真己 (2012) 「地域づくりにおける『学び』と『参加』の関係性についての研究—地域学の視点から—」『西南女学院大学紀要』Vol.16, pp.123-134.
- 平野隆之・古市こずえ・猪俣健一 (2020) 「地域福祉実践者による実践研究を広めるために—実践研究の入門書づくりに向けた模擬的な議論を通じて—」『地域福祉実践研究』第11号, pp.2-16.
- 石村華代 (2015) 「聞き書きを通じた世代間交流の可能性—『聞き書き甲子園』の事例検討を通して—」『九州ルーテル学院大学』No.45, pp.51-60.
- 辛島佐和子 (2012) 「人生の物語がもたらすもの—みやぎ聞き書き村を事例として—」『東北人類学論壇』11, pp.119-139.
- 駒谷なつみ・大津美香・木浪麻里他 (2017) 「【報告】高齢者への聞き書きを通して看護学生が学んだこと」『保健科学研究』8(1), pp.33-40.
- 小関久恵 (2018) 「II 地域人材育成における『聞き書き』の有効性—東北公益文科大学「庄内の達人プロジェクト」実践からの考察」東北公益文科大学総合研究論集『「聞き書き」による新たな「物語」へ—歴史、記憶、世代をつなぐ『場』の創出—』第34号, pp.31-46.
- 厚生労働省 (2017) 「地域力強化検討会最終取りまとめ—地域共生社会の実現に向けた新しいステージへ」地域における住民主体の課題解決力強化・相談支援体制の在り方に関する検討会 (<https://www.mhlw.go.jp/stf/shingi2/0000176885.html> 2020.10.30)
- 熊木正人 (2015) 「生活困窮者自立支援制度はなぜ創設されたのか」『月刊福祉』8, pp.12-16.
- 松原直美・安東則子・八塚美樹 (2015) 「『聞き書き』活動による高齢がん患者の生き方に及ぼす変化と看護実践への可能性を探る」『第45回(平成26年度)日本看護学会論文集』pp.335-338.
- 宮本太郎・村木厚子・古都賢一 (2021) 「社会福祉のこれからと『地域共生社会』づくりの展望」『月刊福祉』1, pp.10-16.
- Myeroff, M (1971) *On caring*, Haper & Row (= 1997 田島真・向野宣之訳『ケアの本質 生きることの意味』みゆる出版.)
- 六車由実 (2012) 『驚きの介護民俗学』医学書院.
- 六車由実 (2016) 「『聞き書き』の自己分析—「オープンな対話」の可能性—」『季刊 政策・経営研究』vol.4, pp.58-71.
- 西岡常一・小川三夫・塩野米松 (2005) 『木のいのち木のころこ 〈天・地・人〉』新潮文庫.
- NPO 法人共存の森ネットワーク (2020) 『聞き書きの手引き』
- 小田豊二 (2012) 『「聞き書き」をはじめよう』図書出版木星社.
- 小田豊二 (2018a) 「『聞き書き』におけるバタフライ効果について」『日本保健医療行動科学会雑誌』33(1), pp.1-6.
- 小田豊二 (2018b) 「『聞き書き』における『聞く』、『書く』、『話す』」『日本保健医療行動科学会雑誌』33(2), pp.24-27.
- 太田義弘・秋山薊二 (1999) 『ジェネラルソーシャルワーカー—社会福祉援助技術論—』光生館.
- 佐野直子 (2015) 「『聞き書き』をもちいた地域づくりの可能性」『人間文化研究所年報』pp.75-76.
- 特定非営利活動法人 地域福祉研究所 (2005) 『コミュニティソーシャルワークの理論』
- 遠山茂樹 (2018) 「III 歴史叙述と『聞き書き』」東北公益文科大学総合研究論集『「聞き書き」による新たな「物語」へ—歴史、記憶、世代をつなぐ『場』の創出—』第34号, pp.46-50.
- 渡辺暁雄 (2018) 「I 社会学から見る『聞き書き』の展開—一個の物語から新たな地域の物語へ—」東北公益文科大学総合研究論集『「聞き書き」による新たな「物語」へ—歴史、記憶、世代をつなぐ『場』の創出—』第34号, pp.24-31.
- 山崎亮 (2016) 『縮充する日本「参加」が創り出す人口減少社会の希望』株式会社 PHP 研究所.
- 結城登美雄 (2009) 『地元学からの出発—この地域を生きた人びとの声に耳を傾ける』農山漁村文化協会.

吉田享代 (2016) 「ソーシャルワーク展開におけるアセスメントのあり方に関する研究—サービスを必要とする人びとのナラティブに着目する意味を通じて—」『東北福祉大学大学院総合福祉学研究科紀要』14, pp.77-96.

## **Possibility of “Kikigaki” : A Review of Previous Studies**

Chikako TAMAKI